名詞由来の *-ed* 形容詞に生じる解釈強制についての予備的考察※

石　田　　崇*

（受付　2022 年 10 月 31 日）

1. は じ め に

本論文の目的は，-(*e*) *d* 接辞を付加して派生する英語の名詞由来形容詞（以下 *-ed* 形容詞；例：***bearded***, ***wooded***, ***blue-eyed***（Bauer et al.（2013: 304））に注目し，これらが名詞修飾をする際に生じる解釈強制（semantic coercion）の仕組みとその解釈プロセスを明らかにすることである。

Bauer et al.（2013: 313）によれば，*-ed* 形容詞は「装備的意味（ornative sense: 'having X, being provided with X'）」を表す（例：***bearded man*** 'man with beard'; ***wooded area*** 'area covered with trees'; ***blue-eyed boy*** 'boy having blue-eyes'）[1]。一方で，このような意味的特性からは予測できない（1）のような事例（cf. 'lexicalised' case（Bauer and Huddleston（2002））が存在する。

（1）	a.	forked road	「分かれ道」	cf. # フォークを備えた道
	b.	dogged persistence	「不屈の努力」	cf. # 犬を備えた粘り強さ
	c.	cupped flower	「カップ状の花」	cf. # カップを備えた花
	d.	crooked business	「不正なビジネス」	cf. # 詐欺師を備えたビジネス
	e.	ragged coat	「ぼろぼろのコート」	cf. # ぼろきれを備えたコート

* 広島修道大学　人文学部

1　Nikolaeva and Spencer（2020）は，所有の意味（possessive meaning）を表す名詞修飾表現における意味上の主要部性（semantic headedness）について，possessive adjective（例：*-'s*（*John's*）や ***my***, ***your***, ***his***, ***their***）と proprietive adjective（例：*-ed* 形容詞）とでは，その関係が対照的であることを指摘している。例えば，possessive adjective（POSS.A（djective））の場合は，修飾対象である名詞（N（oun））との関係が「POSS.A-N：所有者 - 所有物」となる一方，proprietive adjective（PROP.A）の場合は，その逆で「PROP.A-N：所有物 - 所有者」となる（例：***campsite***-PROP.A ***riverbank*** 'a riverbank which has（many）campsites along it'; ***riverbank***-PROP.A ***campsite*** 'a campsite which is by a riverbank（as opposed to in the forest）'）（Nikolaeva and Spencer（2020: 102））。多くの先行研究では，*-ed* 形容詞を possessive adjective としているが，このような指摘に従えば，*-ed* 形容詞が表す本質的な意味は，厳密には possessive ではなく proprietive であると考えるべきであろう。

例えば，（1a）の *forked road* は，「# フォークを備えた道」といった装備的意味ではなく，「分かれ道」という特殊な意味を表す。では，（1）のような例では装備的意味は関わっていないのだろうか。このような問いに対し，本論文では，「*-ed* 形容詞の基体となる名詞は関係名詞（relational noun；以下 RN）に限られ，RN ではない基体名詞は RN へ強制される」という Takehisa（2017）の主張と「名詞修飾における修飾要素はその本来的な特性を維持している」という Ishida（2021）の仮説を統合し，（1）のような例においても，*-ed* 形容詞が表す本来的な装備的意味は，実際には維持されていることを明らかにする。

本論文の構成は以下の通りである。まず 2 節では，*-ed* 形容詞の形態的特性に関する Takehisa（2017）の指摘と分析をまとめる。次に 3 節では，解釈強制および Ishida（2021）によって提唱された名詞修飾表現の解釈に関する仮説を概観する。これらを踏まえ，4 節では問題となる（1）の例を分析し，今後の取り組むべき課題を指摘する。最後に 5 節では，結論を述べる。

2.　*-ed* 形容詞の派生と意味：Takehisa（2017）

Takehisa（2017）は，形態理論の 1 つである「分散形態論（Distributed Morphology）」の観点から，*-ed* 形容詞の派生と意味に関する分析を行っている。Takehisa（2017: 196）によれば，*-ed* 形容詞が表す意味は，*-ed* 接辞が表す「関係（relation）」の意味に由来しており，これが *-ed* 形容詞の基体のタイプとして RN を要求している[2]。ここでは，*-ed* 形容詞の派生と意味について，Takehisa（2017）の分析を中心に概観していく。

まず，*-ed* 形容詞の一般的な形態的特性であるが，Bauer and Huddleston（2002: 1709）は，名詞を基体とする *-ed* 形容詞について‘[t] he construction is extremely productive; […]’と述べている。その生産性の高さは，（2）に挙げられるように，さまざまな接尾辞による名詞化を経て派生した複雑名詞を *-ed* 接辞によってさらに形容詞化することが可能であることからも明らかである。

（2）　a.　sour-visaged
　　b.　good-appearanced, average-intelligenced
　　c.　low-ceilinged
　　d.　fair-complexioned

2　本論文では，分散形態論の観点から *-ed* 形容詞の派生プロセスについて具体的に議論することは控える。

e. battlemented

f. average-lengthed, gited

（Takehisa（2017: 197））

これを踏まえ，Takehisa（2017）は，*-ed* 形容詞が名詞を基体として派生している点を強調している。では，どのような名詞が *-ed* 形容詞の基体となれるのだろうか。

Takehisa（2017）は，*-ed* 形容詞の入力になれる基体名詞のタイプは RN に限られると主張している。RN とは，それ自身が具体的な実体として自己充足的であるような（例：*person*「人」）名詞（例：PERSON（Jack）「Jack は人である」）とは異なり，何か他の対象との関わりや関係が決まることで，初めて意味的に規定されるような名詞を指す。例えば，*friend*「友人」という名詞は，誰が誰にとっての友人であるかという，他の人間との関係を規定することで初めて具体的な実体としての意味を表す（例：FRIEND（Jack, Jill）「Jack は Jill の友人である」）（Newell and Cheung（2018: 3405））。RN として考えられるものを（3）に挙げる。

（3）The List of Relational Nouns

Subclass	Literature examples	Additional examples
Kinship	brother, sister, mother, child, grandmother, husband, wife, spouse, father, daughter, aunt, uncle, cousin, family, relative	stepdaughter, brother-in-law, kin, kindred
Social non-kin	enemy, friend, pet, stranger, neighbour, mayor, governor, commander, co-author, employee, tutor	captain, guitarist, investor, linebacker, lawyer, spokesperson, entourage, confidante
Operational	name, birthday, picture, portrait, tracks, sake, rumor, description, reputation	passenger, solution, cure, hole
Relative part	edge, mantel, side, corner, middle	top, tip, base, leg, eye, body, face
Body part	leg, hand, head, eye, body, face, bone, blood, voice, ulcer, nose, sweat, hairdo, tears, finger	epithelium, duodenum
Properties	height, speed, distance, rating, length, readiness, color, weight, shape, temperature, gesture, habit, fear, posture, shadow	happiness, badness, capacity, range, clarity, piety, extravagance

（Newell and Cheung（2018: 3407）より引用）

Newell and Cheung（2018）は，（3）の先行研究の例（Literature examples）で指摘されている RN に加え，さらに RN として考えられるものを最右列（Additional examples）に加えている。また，Newell and Cheung（2018: 3407）によれば，（3）の表中には，RN としてではなく一般的な意味を表す名詞（‘prominent non-relational meaning(s)’；例：*child*, *tracks*, *mantel*, *leg*,

head, *eye*, *captain*, *body*, *face* など）も含まれているが，ここでは RN として扱っている[3]。

Takehisa（2017）は，*-ed* 形容詞の基体名詞は（4a）のような RN に限られる一方，（4b）のような RN ではない場合は，当該名詞が RN へとタイプシフト（type-shifting）すると主張している。

（4）　a.　Relational:

white-haired, hot-blooded, strong-willed thick-voiced, simple-minded, good-natured, beaked, hoofed, horned, tailed, petalled, barked, branched, fringed, etc.

b.　Non-relational（clothes and accessories）:

white-capped（nurse）, gloved（hand）, silversandaled（feet）, gold-ringed（finger）, whiteaproned（landlord）, etc.

（Takehisa（2017: 203））

Takehisa（2017: 203）によれば，*-ed* 形容詞は「所有構文（possessive construction）」を成しており，RN ではない名詞は，その目的機能（telic function）を基に，所有の意味へタイプシフトを起こしている（cf. Barker（2011），Vikner and Jensen（2002））。また，Takehisa（2017）は，RN へタイプシフトされる名詞は，基本的に服飾（clothes and accessories）に関わる名詞であり，その理由として，服飾の主要な目的・機能である「身に着けること（wearing）」から「所有すること（possessing）」へ「随伴的な意味シフト（concomitant meaning-shift）」が行われるためであると説明している。随伴的な意味シフトとは，例えば，衣服というのは，まず，「身に着けるもの」であり，身に着けるためには「身体的接触が不可欠」であり，それは結果として「身体部位」（つまり，body part などのような RN）を表す，といった連想関係に基づく意味的なシフトのことである。したがって，（5）の例のように，服飾に関わる基体名詞は随伴的な意味シフトが自然と生じるため，*-ed* 形容詞の入力になれるが，（6）のような例は，これが困難であるため容認されないことになる。

（5）　a.　a uniformed commissionaire

b.　a helmeted motorcyclist

c.　a white-coated attendant

（Hudson（1975: 71））

3　このような指摘からも，実際に，どのような名詞を RN として見なすべきかについては，議論の余地があると言えるだろう。

(6) a. *two-carred (man)
b. *big-officed (president)
c. *good-jobbed (student)

(Takehisa (2017: 203))

このような考え方を基本としながら，Takehisa（2017）は，(1) のような語彙化された *-ed* 形容詞に対しては異なる分析を与えている。まず，語彙化された *-ed* 形容詞における *-ed* 接辞は，他の *-ed* 形容詞（例：動詞由来の *-ed* 形容詞など）と同じように音韻的に区別されるとし，この分類に従えば，当該 *-ed* 接辞は，中英語期の音節主音（syllabic）である *-èd*（Harley (2006)）と一致すると述べている。

(7) a. with *-èd* only
crooked, dogged, ragged
b. with *-èd* or *-ed*
aged, forked, hooked, jagged, legged

(Takehisa (2017: 200))

これを踏まえ，(7) における *-ed* 接辞を，状態分詞（stative participle；例：*allegèd*, *blessèd*, *learnèd*）として分析しており，分散形態論の枠組みにおいて，(7) のような語彙化された *-ed* 形容詞は Root 派生[4] であって，一般的な *-ed* 形容詞のような名詞派生とは異なるものと結論づけている。したがって，名詞ではなく Root から派生した (8) のような *-ed* 形容詞は，百科事典的知識（encyclopaedic knowledge）を基にその意味が決まるため，一般的な *-ed* 形容詞のように装備的意味を表さないというわけである。

(8) a. crooked 'bent or twisted' not 'having a crook/crooks'[5]
b. dogged 'having tenacity' not 'having a dog/dogs'
c. ragged 'torn and in a bad condition' not 'having rags'

(Takehisa (2017: 201))

4 分散形態論においては，語彙（lexical item）は本来的にカテゴリーを持たない Root として捉え，カテゴリーは機能範疇（functional category）と併合（merge）することで決まるという仮説に立つ。
5 Takehisa（2017）はここでの *crook* を「杖」の意味で扱っていると思われる。本論文では，「詐欺師」の意味として扱うことにする。

以上，Takehisa（2017）の分散形態論に基づく分析における重要な指摘は，（9）に挙げる２点にまとめられるだろう。

（9）　a.　*-ed* 形容詞の入力になれる基体名詞は RN に限られる。RN ではない名詞は，RN へタイプシフトを起こしている。

　　b.　語彙化された *-ed* 形容詞は，名詞由来ではない分詞形容詞である。

本論文は，Takehisa（2017）によるこのような指摘を見取り図にしながら，語彙化された *-ed* 形容詞の意味が，本当に装備的意味とは関係ないのかどうかについて考察する。次節では，このような問いに答えるために，Ishida（2021）が提唱した名詞修飾表現の解釈に関する仮説を中心に概観していく。

3.　名詞修飾における解釈強制：**Ishida（2021）**

解釈強制（semantic coercion）とは，一般的には，特定の統語環境において，言語表現の意味的な衝突を回避するための解釈上の補正プロセスのことである（Pustejovsky（1995），Pustejovsky and Bouillon（1995）など）。形容詞による名詞修飾表現における解釈上の補正（ここでは解釈強制の一例として扱う）は，従来，修飾対象である主要部名詞を基盤として主に議論されてきた（Pustejovsky（1995），小野（2005），大室（2019）など）。Pustejovsky（1995）は，統語構造は同一ではあるが意味が異なる表現に注目し，その仕組みを捉えるために，意味構造の１つとして名詞の特質構造（qualia structure）を提案している。例えば，（10）のペアはどちらも「冠詞 - 形容詞 - 名詞」という同一の統語構造を持つ名詞句であるが，（10a）の *a bright bulb* は「明るく光る電球」という意味を表す一方，（10b）の *an opaque bulb* は「暗く光る電球」ではなく「電球のガラス部分が曇りガラスである電球」という意味を表す。

（10）　a.　a bright bulb　　（Pustejovsky（1995: 127））

　　b.　an opaque bulb　　（Pustejovsky（1995: 130））

このような意味の違いは，それぞれの形容詞が選択する名詞 *bulb* との意味上の修飾関係が異なるためであると考えられる。（10a）の *bright* は，*bulb* の目的役割（telic role：電球の主要な目的や機能は「明るく照らすこと」）を選択して修飾している一方，（10b）の *opaque* は，*bulb* の形式役割（formal role：電球のガラス部分）を選択して修飾している。つまり，（10b）における *bulb* は，*opaque* という形容詞との関係から，目的役割から形式役割へと修飾上の選

択関係（selective binding）を変更することで適切な解釈が得られる[6]。このように，名詞修飾における解釈強制は，普通，修飾対象である主要部名詞側の特質構造（qualia structure（Pustejovsky（1995: 85–86），小野（2005））内の選択関係（つまり，役割（role））を変更することで生じると言える（大室（2019）など）。

一方，Ishida による一連の研究（Ishida（2018a, b），Ishida（2019a, b），Ishida and Naya（2020），Ishida（2021）など）は，修飾要素である形容詞を基盤としながら，さまざまな名詞修飾表現における解釈の仕組みに対して原理的な説明を試みている。例えば，Ishida（2021）は，名詞修飾における解釈の原理について，（11）のような仮説を提案している。

（11）　名詞修飾に関わる形容詞は，それ自身が修飾要素として本来要求する特性を満たす形で解釈されなければならない。これを満たさないように見える場合も，解釈上，当該特性は維持されている。この場合，当該特性は潜在化しており，それには外的要因が関わっている。

この仮説に基づき，具体的な修飾表現を見ていくことにする。まず，（12）の文脈における「明るい味」という名詞修飾表現を見てみたい。

（12）　［ミートボールの味に関する感想］
「明るい味…，とでもいいますか。これがシチリア的な味なんだって思って食べると気持ちがちょっと地中海。」
（Ishida（2021: 96）; cf. Ishida and Naya（2020: 269））

当該表現は，文脈無しで解釈することは困難であるが，（12）の文脈から，ここで意図された意味は「シチリアのような明るい地方の料理の味」であるため，味のタイプを分類しているのであり，味の性質それ自体を叙述しているのではない[7]。日本語の性質形容詞（ここでは主に「イ型」を指す）は，通常，（13a）のように，名詞が持つ特性・性質を叙述する機能を果たしている（cf. Bolinger（1967））。しかしながら，（13b）のように，「明るい味」のような事例（ほかに，おいしい温度，おいしいお知らせ，寒い声，軽い薬，かわいいお金，やさし

6　Pustejovsky（1995）自身は，（10）のような表現を強制の事例として挙げているわけではないが，ここでは，名詞の特質構造を参照して，修飾要素による選択関係（selective binding）を，解釈上補正しているという意味で，解釈強制の一例として捉える。Pustejovsky（1995）は，現に，このような議論を基に，*John began a book*.「ジョンは本を｛読み / 書き｝始めた。」（Pustejovsky（1995: 115））のような「補部強制（complement coercion）」について議論している（Pustejovsky and Bouillon（1995）；cf. 大室（2019））。

7　ここでの「明るい」は「気持ちが明るくなる」のような比喩的意味ではないことに注意されたい。

いウェットティッシュなど）は，これとは異なる振る舞いを見せる。つまり，叙述形にすると文脈に基づく解釈が得られない。

（13）　a.　　明るい月　　その月は明るい。
　　b.　?? 明るい味　　# その味は明るい。

ここで，「明るい」には，当該形容詞に本来的な叙述修飾と，味のタイプを決める分類解釈との間にずれが生じているが，このずれは，当該形容詞が，本来叙述する対象（この場合「地方」）を文脈に依存しながら，解釈上，補正することで解消されていると説明できる。この解釈上の補正を視覚化すると（14）のように表せる（[ ] 内は，解釈上補正されている部分を表す）。

（14）　「明るい［地方（タイプ）の］味」

（12）の文脈中に「シチリア的な味」という表現から，「明るい」はこれを指しており，最終的に「シチリアのような明るい地方の料理の味」という解釈を得る。つまり，「明るい」は文脈に基づき，メトニミー的に「シチリア料理」を指している。

（11）の仮説に基づいてまとめると，以下の通りである。（12）における「明るい味」は，味のタイプを分類する解釈であり，その解釈が文脈に基づくことで合成的に導き出せることから，ここでの「明るい」は，実際の修飾対象を「地方」として選択しており，本来の叙述形容詞（predicative adjective）としての特性を解釈上，維持している（「明るい地方」;「その地方は明るい」）。これと同時に，メトニミー（「明るい地方」という名詞句全体を「明るい」という形容詞で表す）が外的要因として関わっているために，「明るい味」という表現になっている[8]。

Ishida（2021）は，上記のような分析の妥当性として，（15）のような ‘metonymous NP’（あるいは ‘beheaded NP’）と呼ばれる，名詞句内の主要部が削除される現象（Borkin（1984））を挙げている。

（15）　a.　Turn up the hi-fi.
　　b.　I’m parked in a no-parking zone.

8　このような分析や議論に関しては，柴谷（2021）による「体言化理論（Nominalisation Theory）：形容詞などの連体詞と呼ばれる修飾要素は，実際には，体言に準ずる（文法的）準体言であるとみなす理論」が密接に関わるように思われるが，ここでは指摘にとどめ，立ち入らないこととする（詳しくは柴谷（2021）を参照）。

c. Chomsky is too complicated for freshmen to read.

d. This can is contaminated.

（Borkin（1984: 106））

Borkin（1984）によれば，（15）の表現は，実際には（16）の下線部で表されるように，主要部を明示的に具現した名詞句表現と同じ意味を表している。例えば，（15c）の *Chomsky* は，（16c）の *Chomsky's writings* という名詞句全体の内容を部分的に表しているにすぎない。このことは，PART FOR WHOLE という全体と部分に関わる一般的な認知能力の１つであるメトニミー（metonymy）による効果であると考えられる。

（16） a. Turn up the <u>sound</u> of the hi-fi.

b. My <u>car</u> is parked in a no-parking zone.

c. Chomsky's <u>writings</u> are too complicated for freshmen to read.

d. The <u>contents</u> of this can is contaminated.

（Borkin（1984: 106））

このように，metonymous NP のような現象も含めて考えることで，「明るい味」で見たような解釈強制は，それほど特殊なものではなくなってくる。解釈強制に関する従来の議論と異なるのは，修飾対象である主要部名詞を基盤とした議論ではなく，修飾要素である形容詞側で生じる解釈強制を基盤としている点である。

4. *-ed* 形容詞に関わる解釈強制

ここまで，Takehisa（2017）による *-ed* 形容詞の分析と Ishida（2021）による名詞修飾表現に関する仮説および分析を見てきた。これらの知見を踏まえ，ここでは実際に，*-ed* 形容詞に本来的な装備的意味を表しているように見えない（1）のような事例を具体的に分析し，可能な解釈原理を提案してみたい。具体的には，当該事例における *-ed* 形容詞においても，その本来的な装備的意味が実際には潜在的に維持されており，これには，*-ed* 形容詞に生じている解釈強制とメトニミーが外的要因として関わっていることを主張する。

まず，（17a, b）のような一般的な *-ed* 形容詞については，Takehisa（2017）の主張通り，基体名詞はたしかに RN 相当であると考えられる。（17c）の *helmeted* は，服飾に関わる名詞なので，随伴的な意味シフトが生じて RN へ強制されている例である。

（17）　RN-(*e*)*d* + Head

a.	a bearded man;	a beard-*ed* man	‘a man with beard’
b.	a pointed stick;	a point-*ed* stick	‘a stick having a point’
c.	a helmeted motorcyclist;	a helmet-*ed* motorcyclist	‘a motorcyclist with a helmet’

（cf. Hudson（1975: 71–72））

また，（18）のように，*-ed* 形容詞が複合形容詞（compound adjective）を成す場合であっても，複合内の主要部はやはり RN 相当であると考えられる。例えば，（18a）の場合，複合形容詞である *blue-eye* は，その主要部である *eye* が RN である。（18b）の *roof* や（18c）の *back* も全体に対する部分（relative part）として相対的に規定されるため，やはり RN であると考えられる。

（18）　[Modifier-RN]-(*e*)*d* + Head

a.	a blue-eyed boy;	a [blue-eye]-*d* boy	‘a boy having blue-eyes’
b.	a red-roofed house;	a [red-roof]-*ed* house	‘a house having a red-roof’
c.	a hard-backed book;	a [hard-back]-*ed* book	‘a book having a hard-back’

（cf. Hudson（1975: 71））

以上が一般的な *-ed* 形容詞の場合である。では，（1）で見た語彙化された *-ed* 形容詞について見ていく。Takehisa（2017）は，これらに対して別の分析を施しているが，本論文は，これらもまた，上記の（18）と類似した分析が可能であることを論じる。

まず，（1）の語彙化された *-ed* 形容詞においても解釈上の補正（つまり，解釈強制）が関わっていると想定してみたい。この場合，Takehisa（2017）に倣い，当該 *-ed* 形容詞の基体名詞がすべて RN ではない名詞（Non-RN）であるとすれば，RN へとタイプシフトを起こしているはずである。そこで，本論文では，（19）の［ ］内の小型大文字で示されるように，RN 相当の名詞を解釈上補うことで，タイプシフトが生じていると考える。

（19）　Base noun[-RN]-(*e*)*d* + Head

a.	forked road;	fork [-SHAPE / -FORM]-(*e*)*d* road
b.	dogged persistence;	dog [-NATURE / -TEMPER]-(*e*)*d* persistence
c.	cupped flower;	cup [-SHAPE / -FORM]-(*e*)*d* flower
d.	crooked business;	crook [-NATURE / -TEMPER / -DISPOSITION]-(*e*)*d* business
e.	ragged coat;	rag [-NATURE / -ORIGIN / -PATTERN]-(*e*)*d* coat

このことから，（1）の語彙化された *-ed* 形容詞は，実際には「*-ed* 形容詞の基体名詞と RN を含む複合形容詞から成っている」と捉えることができるようになる。例えば，（19a）の場合，*forked* の基体名詞である *fork* は，実際には，*fork-shaped* あるいは *fork-formed* のような複合形容詞（*fork*［-RN］*-ed*）から成っており，解釈上，*shape* や *form* のような RN 相当の名詞が補われていると想定するのである。このような分析は，修飾対象である主要部名詞（ここでは *road*）との選択関係が自然と想定できることや，実際の解釈（*forked road*「分かれ道」≒「フォークの形状のように分かれている道」）と合致すること，また，*Oxford English Dictionary*（以下 *OED*）（s.v. *forked*（*adj*））が ‘having a fork or fork-like end; shaped like a fork, bifurcate, branching’ と説明していることからも妥当であるように思われる。他に，（19b）の *dogged* も，実際には *dog-natured* や *dog-tempered* のような解釈強制が働いていると考えられる。このことは，*OED*（s.v. *dogged*（*adj. and adv.*））が ‘having the persistence or tenacity characteristic of some breeds of dog; obstinate, stubborn; resolute’ と記述していることからも明らかである。

ここで，*-ed* 形容詞に解釈強制が生じているという点では似ているが，Takehisa（2017）の主張と異なる点を再度述べておきたい。Takehisa（2017）は，一般的な RN ではない場合は，服飾に関わる随伴的な意味シフトによる解釈強制が生じるとしている。一方で，（19）で見たようなタイプシフトは，Takehisa（2017）が主張しているように，服飾に関わる名詞であり，随伴的な意味シフトでなければならない，といった条件に当てはまるものではない。これらを踏まえ，かつ Takehisa（2017）が指摘した *-ed* 形容詞の入力になれる名詞が RN に限られるという重要な指摘を維持するためには，3 節で見たような「明るい味」に関する Ishida（2021）の分析を援用することが必要となる。つまり，「明るい味」の分析と同じように，*-ed* 形容詞の基体名詞が，そのままでは主要部名詞の特質構造の中から適切な役割と選択関係を結ぶことができない場合は，*-ed* 形容詞自体がタイプシフトを起こしているのである。このことは，当該 *-ed* 形容詞も形容詞側で生じる解釈強制の事例の 1 つとして捉えられる可能性を示唆している。さらに，「明るい［地方の］味」の場合もそうであったが，metonymous NP のような現象があることを踏まえると，RN 相当の名詞が解釈上補われることはあっても，実際の表現として，意味的に自己充足的ではない RN 相当の名詞が省略されることは珍しいことではないだろう。したがって，*fork-shaped road* の場合は，メトニミー（PART FOR WHOLE）が働くことで，RN 相当である *shape* が省略され，結果的に *forked road* といった形として現れていると考えられる。

では次に，（1）のような語彙化された *-ed* 形容詞は装備的意味を備えているかどうかについてであるが，これは，（19）で見たような解釈強制の仕組みを考えることで捉えられる。つまり，当該 *-ed* 形容詞は，解釈上，RN を含む複合形容詞のようなものを成していると仮定すれば，その装備的意味は前置詞の *with* を使って（20）のように表すことができ，*-ed* 形容詞

に本来的な装備的意味が，実際には維持されていることが明らかになってくる[9]。

（20）	a.	*forked* road;	road *with a fork-shape*	cf. #road *with a fork*
	b.	*dogged* persistence;	persistence *with a dog-temper*	cf. #persistence *with a dog*
	c.	*cupped* flower;	flower *with a cup-form*	cf. #flower *with a cup*
	d.	*crooked* business;	business *with a crook-disposition*	cf. #business *with a crook*
	e.	*ragged* coat;	coat *with a rag-nature*	cf. #coat *with a rag*

例えば，（20a）の *forked road* は，*road with a fork-shape* のような意味を潜在的に表していると考えられる。このことは，もし *forked* が複合形容詞を成しておらず，RN を含む解釈強制を起こしていない基体名詞をそのまま用いて *#road with a fork* としてしまうと，実際の解釈と相いれないため，装備的意味を見出すことが困難になり，Takehisa（2017）のように別の分析を充てる必要性が出てくることを予測する。

以上，本論文が問題として注目している（1）のような語彙化された *-ed* 形容詞の事例において，*-ed* 接辞が本来的に表す装備的意味は，Takehisa（2017）による指摘（*-ed* 形容詞の入力になれる基体名詞は RN に限られる）と Ishida（2021）による名詞修飾についての仮説と分析（形容詞側で生じる解釈強制）を統合させることで，潜在的に維持されていることが明らかになる。当該分析によれば，*-ed* 形容詞に本来的な装備的意味は，どのような場合であっても解釈上は維持されていることになり，これによって，語彙化しているが故に，*-ed* 形容詞には特殊かつ予測不能な意味が備わっているという捉え方や，Takehisa（2017）が分析しているように，一般的な *-ed* 形容詞と別の分析を立てる必要もなくなってくると思われる。

一方で，当該分析に問題がないわけではない。以下では，本論文が行った分析に関わる主要な問題を 3 つ取り上げる。まず，本論文は *-ed* 形容詞の基体名詞は RN に限られるという Takehisa（2017）の主張を踏まえて考察を行ってきた。しかしながら，例えば，（21a）のような自然物や（21b）のような天候に関わる名詞および（22）のような飲み物（特にアルコール）を表す名詞は，普通，RN として見なされることはないため，説明が難しくなる。また，

9　ここでの議論は，構造上の派生関係としてではなく，あくまで解釈上の原理としてのものであるが，名詞修飾要素の形態具現に関する重要な研究として，Nagano（2013）を挙げておきたい。その理由は，ここで指摘している解釈強制の仕組みが，Nagano（2013: 123）が指摘している，英語の「直接修飾（direct modification）」と「間接修飾（indirect modification）」における名詞修飾要素の形態具現の原理と少なからず一致しているように思われるからである。例えば，間接修飾形である［NOUN＋$P_{possession}$］（P は preposition；例：*man with beard*）は，直接修飾形である *-ed* 形（例：*bearded man*）か *-y* 形（例：*thorny*（*branch*）；*yeasty*（*bread*））（Hamawand（2007: 72））のいずれかで具現するというものである（Nagano（2013: 127））。なお，*-ed* 形と *-y* 形の競合に関する最新の研究については，Nagano（2022）を参照されたい。

たとえ（22）の名詞類が装備的意味（例：*ginned*「（米俗）酔っぱらった，酩酊した」;「ジン入りの」→「アルコールを摂取した」→「酔っぱらった」）を表していると想定しても，RN ではない普通名詞を基体とする *-ed* 形容詞に対する説明が難しくなるように思われる。

（21） a. curved, fished, leaved, rocked, sanded, stoned, wooded
b. aired, clouded, iced, misted, snowed, sunned
（Nagano（2022: 9）より抜粋）

（22） ginned, grogged, kegged, rummed
（『プログレッシブ英語逆引き辞典』，s.v. *-ed*[2]）

Takehisa（2017）は（21）や（22）のような名詞類を扱っていないが，私見でもこれらの名詞に解釈上付加する RN 相当の名詞を想定することは難しいため，今後はこのような名詞も含めて *-ed* 形容詞による名詞修飾を考察する必要があるだろう。また，RN と考えられる名詞であっても容認されない（23）のような事例が多く観察されている。

（23） a. *a wifed man （Hudson（1975: 71））
b. *a headed boy （Hirtle（1970: 27）, Goldberg and Ackerman（2001: 811））
c. *an idea'd character （Hirtle（1970: 22））
d. *a sized family （Hirtle（1970: 28））
e. *a doored bungalow （Hirtle（1970: 22））

例えば，（23a）の *wifed* や（23b）の *headed* は，それぞれの基体名詞が RN であるにも関わらず（（3）のリストを参照），*-ed* 形容詞単独で名詞修飾要素にはなれない。この場合，基体名詞を修飾する別の修飾要素を義務的に必要とする（「義務的付加詞（obligatory adjunct）」；例：{*red / yellow / four / big*}*-headed*）ことが指摘されている（Goldberg and Ackerman（2001）など）。同じように，（23c）の *idea'd* や（23d）の *sized* も単体では容認されないが，それぞれ *a one-idea'd character* や *a decent-sized family*（Jespersen（1954: II, 375））のような複合形容詞にすれば容認される。また，（23e）の *doored* は容認されないが，*verandahed* であれば容認される（*a verandahed bungalow*（Poutsma（1926: 559））という点も興味深い。他に，*-ed* 接辞付加の可能性について，類似した意味を表すにも関わらず，*bearded*（*beard* < *beard*＋*-ed*）は容認される一方，**moustached*（*moustache*＋*-d*）は容認されない（Hudson（1975: 69））。このような観察に対して，Takehisa（2017）の RN に基づく分析はどこまで説明力を持つと言えるだろうか。

最後に，形態論上の問題として，Hirtle（1970）や Hudson（1975: §5）が指摘しているように，*-ed* 形容詞は名詞由来と動詞由来のどちらなのか，という問題が挙げられる。例えば，Pence and Emery（1964: 305）は，*hearted*（例：*a broken-hearted child*），*natured*（例：*a good-natured man*），*blooded*（例：*a full blooded Scotch collie*）の基体名詞は動詞用法を持たないため，名詞派生であると結論付けている。このように，動詞としての用法をそもそも持たない *-ed* 形容詞であればわかりやすいが，（24）は（24a）の名詞由来と（24b）の動詞由来の２つの解釈の可能性がある。

（24）　*a paper-covered book*

a.　$_{N}$[paper cover]-*ed*　　（cf. *a hard-covered book*）

b.　paper $_{V}$[cover]-*ed*　　（cf. *a leaf-covered path*）

（cf. Hudson（1975: 71））

さらなる曖昧な例として，Hudson（1975: 71）は，*a pointed stick* という例を挙げている。この場合の *pointed* は，たしかに，名詞由来（$_{N}$[*point*]-*ed*; 'having a point'）と動詞由来（$_{V}$[*point*]-*ed*; 'provide with a point'）の間で意味上の差を明確につけることが困難であり，このような *-ed* 形容詞が多く存在している点も併せて指摘している。

以上，*-ed* 形容詞に関わる諸問題については今後の課題とするが，語彙化された特殊な場合として扱われている（1）で取り上げた *-ed* 形容詞については，Takehisa（2017）の主張と Ishida（2021）の仮説に基づくことで，*-ed* 形容詞に本来的な装備的意味を維持した形でその解釈プロセスを明らかにした。

5.　お　わ　り　に

本論文は，*forked road* や *dogged persistence* のような語彙化した *-ed* 形容詞の特殊な意味に注目し，当該意味は，Takehisa（2017）が主張している RN を基体名詞とする派生分析と Ishida（2021）の名詞修飾に関する仮説を統合させることで捉えられることを明らかにした。具体的には，*-ed* 形容詞の基体名詞は，解釈上，RN 相当名詞と複合形容詞を成しており，意味的に希薄な主要部である RN は，名詞句や名詞修飾要素でよく見られる「全体を部分で表す」というメトニミーによって省略されることで解釈強制が生じていることを明らかにした。このような分析によって，実際には，問題となる *-ed* 形容詞においてもなお，*-ed* 接辞に本来的な装備的意味は維持されており，この点で，他の一般的な *-ed* 形容詞と変わらないことになる。

※本論文は，2022年９月15日にオンライン（Zoom）で開催された第10回筑波英語学若手研究会における発表「名詞由来の *-ed* 形容詞が表す意味について」の内容を修正発展させたものである。本研究の内容に関して貴重なコメントを下さった参加者の方々に心より感謝申し上げる。本研究は，JSPS 科研費21K20031「英語の派生形容詞に生じる解釈強制の原理と仕組みの解明」の助成を受けている。

参　考　文　献

Barker, Chris (2011) “Possessives and Relational Nouns,” *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning*, ed. by Claudia Maienborn, Klaus von Heusinger, and Paul Portner, 1108–1129, Mouton de Gruyter, Berlin.

Bauer, Laurie and Rodney Huddleston (2002) “Lexical Word-Formation,” *The Cambridge Grammar of the English Language*, ed. by Rodney Huddleston and Geoffrey K. Pullum, 1621–1721, Cambridge University Press, Cambridge.

Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, and Ingo Plag (2013) *The Oxford Reference Guide to English Morphology*, Oxford University Press, Oxford.

Bolinger, Dwight (1967) “Adjectives in English: Attribution and Predication,” *Lingua* 18, 1–34.

Borkin, Ann (1984) *Problems in Form and Function*, Ablex, Norwood, New Jersey.

Goldberg, Adele E. and Farell Ackerman (2001) “The Pragmatics of Obligatory Adjuncts,” *Language* 77(4), 798–814.

Hamawand, Zeki (2007) *Suffixal Rivalry in Adjective Formation: A Cognitive-Corpus Analysis*, Equinox, London.

Harley, Heidi (2006) *English Words: A Linguistic Introduction*, Blackwell, Oxford.

Hirtle, Walter H. (1970) “*-Ed* Adjectives like ‘Verandahed’ and ‘Blue-Eyed’,” *Journal of Linguistics* 6(1), 19–36.

Hudson, Richard. A. (1975) “Problems in the Analysis of *Ed*-Adjectives,” *Journal of Linguistics* 11(1), 69–72.

Ishida, Takashi（2018a）「『共感覚的比喩』の共感覚性と比喩性再考――修飾要素と被修飾要素の性質と関係性に注目して――」『電子情報通信学会技術研究報告（信学技報）』HCS 117(509), 125–130.

Ishida, Takashi (2018b) “Transferred Epithet as a Domain Adjective,” *Tsukuba English Studies* 37, 63–93.

Ishida, Takashi (2019a) “Two Types of A-N Synaesthetic Modifications in English: Predication-Based vs. Domain-Based,” *Papers from the 19th National Conference of the Japanese Cognitive Linguistics Association Vol.19*, 121–133.

Ishida, Takashi (2019b) “Frame-Based Adjectives: A Proposal for a Third Type of Adjective,” poster presented at the 15th International Cognitive Linguistics Conference 2019, 8th August, Kwansei Gakuin University, Hyogo.

Ishida, Takashi (2021) *A Construction Grammar Approach to Noun Modification by Adjectives in English and Japanese*, Doctoral dissertation, University of Tsukuba.

Ishida, Takashi and Ryohei Naya (2020) “Qualitative Adjectives as Reference Modifiers in Japanese,” *Papers from the 20th National Conference of the Japanese Cognitive Linguistics Association Vol. 20*, 269–281.

Jespersen, Otto (1954) *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part II Syntax*, Allen & Unwin, London.

Nagano, Akiko (2013) “Morphology of Direct Modification,” *English Linguistics* 30(1), 111–150.

Nagano, Akiko (2022) “Affixal Rivalry and Its Purely Semantic Resolution among English Derived Adjectives,” *Journal of Linguistics*, 1–32.

Newell, Edward and Jackie C. K. Cheung (2018) “Constructing a Lexicon of Relational Nouns,” *Proceedings of the 11th International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2018)*, 3405–3410, Miyazaki, Japan, European Language Resources Association (ELRA) .

Nikolaeva, Irina and Andrew Spencer (2020) *Mixed Categories: The Morphosyntax of Noun Modification*, Cambridge University Press, Cambridge.

大室剛志（2019）「生成文法における自律意味論の必要性」『英文学研究 支部統合号』第11巻，179–186，日本英文学会.

小野尚之（2005）『生成語彙意味論』くろしお出版，東京.
Pence, Raymond W. and Donald W. Emery (1964) *A Grammar of Present-Day English*, Macmillan, New York.
Poutsma, Hendrik (1926) *A Grammar of Late Modern English*, *Part II*, *Section II*, Noordhoff, Groningen.
Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.
Pustejovsky, James and Pierrette Bouillon (1995) "Logical Polysemy and Aspectual Coercion," *Journal of Semantics* 12, 133–162.
柴谷方良（2021）「連体修飾の文法：類別詞と文法性を中心に」『体言化理論と言語分析』，鄭聖汝・柴谷方良（編），459–555, 大阪大学出版会，大阪.
Takehisa, Tomokazu (2017) "Remarks on Denominal *-Ed* Adjectives," *Proceedings of the 31st Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 196–205.
Vikner, Carl and Per Anker Jensen (2002) "A Semantic Analysis of English Genitive: Interaction of Lexical and Formal Semantics," *Studia Linguistica* 56(2), 191–226.

辞　　書

Oxford English Dictionary (*OED*) [online], Oxford University Press, retrieved from https://www.oed.com/
国広哲哉・堀内克明（編）（1999）『プログレッシブ英語逆引き辞典』小学館，東京.

Summary

A Preliminary Study on the Semantic Coercion of Denominal *-ed* Adjectives

Takashi Ishida*

This study highlights exceptional (or 'lexicalised') cases of denominal *-ed* adjectives such as *forked* in *forked road* and *dogged* in *dogged persistence*. Here, their suffixal 'ornative' sense or 'possessive' meaning is considered vague, and no longer maintained in the apparent relationship between the modifier and the head noun (e.g., *forked road*; 'road shaped like a fork' but not 'road with/having a fork'). Ishida's (2021) hypothesis for the semantics of noun modification by adjectives, together with Takehisa's (2017) morphological analysis of *-ed* adjectives, helps form the argument that irregular patterns of *-ed* adjectives can also be analysed similar to the general case of *-ed* compound adjectives (e.g., *a* [*blue-eye*] *-d boy* 'a boy with/having blue-eyes'), and peculiar expressions of noun modification with adjectival coercion via metonymy (e.g., *bright taste* – *bright* [-REGION] *taste* – 'the taste of a bright region'). This analysis effectively enables us to understand the relevant *-ed* adjectives as continuing to retain their intrinsic ornative sense (i.e., *forked road* – *fork* [-SHAPE] *-d road* – 'road with/having fork-shape').

* Faculty of Humanities and Human Sciences, Hiroshima Shudo University